

# 総合学科高校における高校生の学習観

南本長穂

## 1. はじめに 一問題の所在一

本稿では、総合学科高校における生徒の学習の現状や学習観の問題を中心に検討していく。なお、高校生の学習観に関しては、教育心理学の分野での植木理恵の研究がある。市川伸一が提案した学習観を測定する尺度を踏まえて、学習観を「学習とはどのようにして起こるのか」という学習成立に関する「信念」を明らかにしている<sup>1)</sup>。

しかし、本稿で主に検討する学習観の問題とは、高校生が学習とか勉強と呼ばれる行動や行為に付与している意味である。それは、90年代からわが国では、小・中学生の「学びからの逃走」とか、「階層差による学習時間の拡大」「努力の階層差・不平等」など、学ばない子どもの存在が問題化されてきている。また、国際的な学力テストの結果の公表などのもとで、学力低下問題が大きな社会的関心事となった。この状況は2010年代に入っても依然として続いており、学習時間や学習の場、学習を支える経済的文化的背景などに注目が集まり、小中学生から大学生まで、学習や勉強の現状やそのあり方に関する問題への関心は衰えていない<sup>2)</sup>。

学習を取り巻くわが国における社会的状況を踏まえ、本稿では、近畿地方のM高校に学ぶ高校生を事例的に取り上げることにした。すなわち、進路指導やキャリア教育の充実、生徒の興味関心の多様化などに対応すべく、1990年代に創設された総合学科高校における高校生の学習の特徴、及びその高校生の抱く学習観を検討していく。

こうした問題意識から、調査データに基づき、次の点を明らかにしていく。1つは、M高校に学ぶ生徒の特徴を捉えることである。総合学科高校に学ぶ生徒の学習と生活の現状からその特徴を明らかにする。2つは、M高校に学ぶ生徒が捉える学習の意味である。生徒は学習にどのような意味や意義を付与しているかという問題である。

なお、M高校での調査は、平成25年7月末に、1年次と2年次と3年次の生徒を対象に実施した。各教室で担任教師が質問紙を配布し、生徒が質問紙に回答を記入し、各人の回収用封筒に入れて厳封した後、担任教師が回収を行った。なお、記入漏れ等の無効回答は33部。

有効回答者は、1年次293名(男子137名、女子156名)、

2年次270名(男子124名、女子146名)、3年次278名(男子104名、女子174名)、合計841名(男子365名、女子476名)。男女の比率は全体で男子43.4%、女子56.6%。なお、平成25年5月1日時点の在籍者は、1年次320名、2年次316名、3年次294名、合計で930名。

## 2. M高校及び生徒の特徴

### 1) 卒業後の進路状況からみたM高校

まず、平成26年度の学校要覧のデータから卒業後の進路の状況をみとめる。なお、平成25年度卒業生(288名)は本調査における3年次の生徒である。調査実施時期は7月で、この3年次の生徒の卒業時の進路が、学校要覧に記載されている。すなわち、大学114名(国公立4名、私立110名)、短期大学26名、専門学校100名、就職24名(公務員4名、民間就職20名)、その他24名である。卒業生全体に占める内訳の比率は、大学進学者が39.6%、短期大学進学者が9.0%、専門学校進学者が34.7%、就職が8.3%、その他(浪人・未定等)が8.3%。

そして、大学と短大への進学者を合わせると、その進学者が48.6%。ちなみに、平成26年3月時点での全国の大学・短大への進学率は、53.8%である<sup>3)</sup>。また、総合学科からの大学・短大への進学率の全国平均は35.1%、就職率は26.4%である。全学科の全国平均は17.5%である。

すなわち、M高校の大学・短大への進学率は、全国平均を少し下回るところに位置づくが、総合学科高校の中では全国平均を上回っている。

卒業後の進路からみるM高校の特徴をみておくと、まず、M高校に入学した生徒は、高校卒業後の進路をどのように考えているのか。表1は年次別に示した卒業後の希望進路である。これから、4つのことがわかる。

1つは、大学への進学希望を決めている生徒は、必ずしも多くないこと。1年次で40.7%、2年次で53.4%、3年次で42.1%。2つは、専門学校への進学希望が1年次で23.4%、2年次で24.3%、3年次で31.7%と、全国の総合学科高校と同様に、専門学校への進路希望者の比率が高い。3つは、進路未定という生徒の存在である。1年次で11.4%、2年次で2.6%、3年次で3.0%。又、「その他」の比率を加えると、1年次で14.5%、2年次

表1 年次（学年）別にみた卒業後の進路希望（7月末時点）

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. 国公立大学への進学希望	7.9	8.2	4.4	6.9
2. 希望大学の有無とは関係なく 大学への進学希望	32.8	45.1	37.6	38.4
3. 短期大学への進学希望	8.3	6.0	8.9	7.7
4. 専門学校への進学希望	23.4	24.3	31.7	26.4
5. 就職希望	13.1	9.0	9.6	10.6
6. 卒業後のことは未定	11.4	2.6	3.0	5.8
7. その他	3.1	4.9	4.8	4.2
合計	100.0(290)	100.0(268)	100.0(271)	100.0(829)

$\chi^2 = 43.19$      $p < .001$      $df = 12$

で7.5%、3年次で7.8%。総合学科高校における創設の理念及び教育課程編成の特徴となっているのは、生徒の進路希望の明確化を図ることを通しての教育活動の組織化であり活性化である。この点では進路未定の生徒が少なからず存在していることは、総合学科高校の創設理念の浸透が少し困難を抱えているという問題もみられる。

なお、学校要覧でみた高校卒業後の進路の状況から推測すると、この「進路未定」と回答した生徒は、「就職」というよりも「大学」「短大」「専門学校」へと進路を明確化していこうとも予想されるが。

以下、調査結果をもとに生徒の特徴を探っていく。

## 2) 高校生が捉えるM高校の雰囲気

M高校の生徒はM高校をどのように捉えているのか。23の質問項目を用意し、高校の雰囲気として、どの程度感じているかを聞いた。因子分析を行った（表2参照）。5つの因子が抽出され、次のようなネーミングを試みた。

第1因子として、高校での勉強を中心にまじめに諸活動に取り組むといった「学校文化への適応」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「1. 授業中、勉強にまじめに取り組む生徒が多い」とか、「5. 学校のきまりや規則を守って、規則正しい生活や学習ができている生徒が多い」など、この第1因子に分類された項目は高校の目指す教育方針に即した活動や行動を行うことにかかわる項目からなっている。いずれの項目においても、「強く感じる」と「まあまあ感じる」を合わせた肯定的回答が高い比率を占めている。

第2因子として、教師との関わりに関する項目が中心を占めているので、「教師との関係」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「17. 先生には、授業の仕方に自信を持った先生が多い」、「16. 何でも話やすく、相談しやすい先生が多い」、「8. 教科書の内容をわかりやすく教えてくれる先生が多い」という質問項目

では、「強く感じる」と「まあまあ感じる」を合わせた肯定的回答が高い比率を占めている。

第3因子として、「生徒の人間関係」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「21. 学級の雰囲気は明るく、学級は自分にとって、居心地が良い」、「3. 同じクラスの中には、自分と話の合う生徒が多い」など。この因子は、高校生活の中で人間関係にかかわる項目から構成されており、各質問項目で、「強く感じる」と「まあまあ感じる」を合わせた肯定的回答が高い比率を占めている。

第4因子として、「高校生の興味」とネーミング可能な項目があげられる。この因子は、授業の場面を少し離れた、「19. テレビのドラマ、タレントや歌手、歌・音楽の話題について、よく知っている生徒が多い」とか。「2. スマホや携帯、インターネットに興味を持つ生徒が多い」、「6. 文化祭、体育大会、総合学科発表会などの学校行事に積極的に取り組む生徒が多い」の項目から構成されている。高校生が興味や関心を持ちやすいものであり、特に「強く感じる」と「まあまあ感じる」を合わせた肯定的回答が高い比率を占めている。

第5因子として、「学校文化への非同調」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「13. マンガや雑誌をよく読んでいる生徒が多い」とか、「9. 教師の授業の仕方や進め方に満足していない生徒が多い」では、「強く感じる」と「まあまあ感じる」を合わせた肯定的回答が一定の比率を占めている。

## 3) 高校生の満足度

まず、M高校に入学したことをどう捉えているのか。満足を感じているのか、それとも不満を抱いたのか。高校での満足度を「授業や勉強」、それ以外の「生活」という2つに区分してみる。例えば、「授業や勉強」には満足しているが、「生活」には不満を抱く場合とか、逆に、「授業や勉強」に不満があっても、「生活」には満

表2 高校の雰囲気について

	強く感じる	まあまあ感じる	あまり感じない	まったく感じない	合計
第1因子 学校文化への適応					
1. 授業中、勉強にまじめに取り組む生徒が多い	6.3	59.3	31.7	2.7	100.0
5. 学校のきまりや規則を守って、規則正しい生活や学習ができていている生徒が多い	8.7	51.5	35.4	4.4	100.0 *
7. 予習や復習をしてから、授業にのぞむ生徒が多い	2.5	30.0	56.4	11.2	100.0 *
4. 将来の職業ややりたいことを意識し勉強する生徒が多い	23.9	55.0	19.2	1.9	100.0 ***
14. 勉強と部活を両立させている生徒が多い	14.1	58.0	25.7	2.3	100.0
11. 高校に誇りを感じて高校生活を送る生徒が多い	10.1	43.8	41.3	4.8	100.0 ***
第2因子 教師との関係					
17. 先生には、授業の仕方に自信を持った先生が多い	9.8	53.8	33.3	3.2	100.0 ***
16. 何でも話しやすく、相談しやすい先生が多い	8.1	38.1	45.0	8.8	100.0 ***
8. 教科書の内容をわかりやすく教えてくれる先生が多い	8.1	60.5	28.2	3.2	100.0 ***
20. 文学、歴史、科学、芸術など、教科書では学べない内容や、生徒の興味のわくこと（話題）を話してくれる先生が多い	12.7	53.6	30.7	3.0	100.0 ***
12. 教室や実験室等の設備が良く、運動施設も整っている	14.2	50.3	28.8	6.7	100.0 **
18. 勉強やスポーツなどがよくできるという自信やプライドを持った生徒が多い	13.8	53.6	31.4	1.2	100.0 *
第3因子 生徒の人間関係					
21. 学級（クラス）の雰囲気（ふんいき）は明るく、学級は、自分にとって、いごちが良い	29.1	50.2	16.0	4.8	100.0
3. 同じクラスの中には、自分と話が合う生徒が多い	25.1	51.8	19.9	3.2	100.0
22. 成績に差があっても、友達になりやすい雰囲気がある	41.8	49.5	8.0	0.7	100.0 *
23. みんなの前で発表したり、協力しながら活動することが好きだったり、得意な生徒が多い	24.0	58.6	16.4	1.0	100.0 ***
第4因子 高校生の興味					
19. テレビのドラマ、タレントや歌手、歌・音楽の話題について、よく知っている生徒が多い	33.7	56.1	9.8	0.5	100.0 *
2. スマホや携帯、インターネットに興味を持つ生徒が多い	57.6	39.2	3.1	0.1	100.0 *
6. 文化祭、体育大会、総合学科発表会などの学校行事に積極的に取り組む生徒が多い	48.2	44.3	7.3	0.2	100.0 **
第5因子 学校文化への非同調					
13. マンガや雑誌をよく読んでいる生徒が多い	4.5	24.6	49.3	21.6	100.0 *
10. 休み時間でも、生徒の話題は勉強や授業のことが多い	1.8	11.1	52.9	34.3	100.0 ***
9. 教師の授業の仕方や進め方に満足していない生徒が多い	8.9	47.4	41.0	2.7	100.0 ***
15. 放課後や土・日曜日に予備校や塾に行っている生徒が多い	5.0	35.8	52.3	6.9	100.0 ***

項目前の番号は、質問紙での配列順序

注) 年次別にみて、\*は5%の水準で、\*\*は1%の水準で、\*\*\*は0.1%の水準で、有意差があることを示している。

足な生徒もいるのではないか。多様なパターンが想定される。

まず、表3では「授業や勉強」への満足度をみた。年次別による有意差はない。「とても満足」は全体では17.2%。「不満もあるが、満足が大きい」が最も高い選択率で、45.9%。この2つの数値を合わせると、63.1%。つまり、約6割強の生徒は授業と勉強に一定の満足感を抱いている。なお、「満足と不満足が半々」が26.9%であり、「不満の方が少し多い」は6.2%、「満足していない」は3.8%であり、不満感が大きな生徒は全体的にみると少なく1割である。

また、「生活（授業や勉強以外）」への満足度をみたのが表4である。表3の結果と比べると、満足度が高いことがわかる。「とても満足」は40.0%に達している。特に3年次では、48.2%と大きな比率である。そして、「不満もあるが、満足が大きい」が35.0%。「満足と不満足が半々」が15.9%。以上の3つの回答を合わせると約9割の生徒が高校での生活に多大の満足感を抱いていることがわかる。なお、表3と表4とも、年次別に有意差は

ない。以上の結果から、高校で授業や勉強における満足度に加え、生活全般にも満足度が高いことがわかった。M高校生は高校での学習と生活に満足感を感じている。

#### 4) 学校外での学習

次に、M高校の生徒は学校外でどの程度学習を行っているのか。学校外での学習の状況をみることにする。

表5は、塾や予備校にどの程度行っているかをみた。年次による有意差がみられた。行っている生徒の比率は1年次（22.9%）と3年次（21.4%）がほぼ同じ比率である。つまり、ほぼ4人に1人の割合である。2年次のそれは13.1%と低いが、「今後行く予定がある」と回答した生徒が9.0%いる。

家庭では、勉強はどの程度なされているのか。表6-1は、家庭で平日に週の何日勉強しているかを聞いた結果である。年次による有意差がみられる。3年次に、「ほとんど毎日する」が増えていることがわかる。1年次で7.2%、2年次で11.5%であるが、3年次では23.8%と比率が高まっている。なお、「ほとんどしない」と答え

表3 高校での授業や勉強への満足度

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. とても満足	15.7	13.3	22.7	17.2
2. 不満もあるが、満足が大きい	46.4	45.9	45.3	45.9
3. 満足と不満足が半々	28.0	30.0	22.7	26.9
4. 不満の方が少し多い	6.5	7.0	5.0	6.2
5. 満足していない	3.4	3.7	4.3	3.8
	100.0(293)	100.0(270)	100.0(278)	100.0(841)

$$\chi^2 = 11.79 \quad df = 8$$

表4 高校での生活（授業や勉強以外）への満足度

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. とても満足	36.2	35.6	48.2	40.0
2. 不満もあるが、満足が大きい	37.5	35.6	31.7	35.0
3. 満足と不満足が半々	16.0	19.6	12.2	15.9
4. 不満の方が少し多い	6.1	5.2	4.3	5.2
5. 満足していない	4.1	4.1	3.6	3.9
	100.0(293)	100.0(270)	100.0(278)	100.0(841)

$$\chi^2 = 14.29 \quad df = 8$$

表5 塾や予備校に行っているか

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. 行っている	22.9	13.1	21.4	19.3
2. 行っていない	76.0	77.9	78.3	77.4
3. 今後行く予定がある	1.0	9.0	0.4	3.4
	100.0(292)	100.0(267)	100.0(276)	100.0(835)

$$\chi^2 = 44.41 \quad p < .001 \quad df = 4$$

表6-1 平日に、家で週のうち何日ぐらい勉強をするか

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. ほとんど毎日する	7.2	11.5	23.8	14.1
2. 週に3～4日する	7.5	11.2	7.9	8.8
3. 週に1～2日する	20.1	21.2	7.9	16.4
4. 塾や予備校に行かない日は、家で勉強する	1.7	0.7	1.4	1.3
5. 家ではほとんどしない	63.5	55.4	58.8	59.4
	100.0(293)	100.0(269)	100.0(277)	100.0(839)

$$\chi^2 = 53.28 \quad p < .001 \quad df = 8$$

表6-2 休日における勉強時間（塾・予備校での勉強時間を含む）

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. 3時間以上	4.8	5.9	26.3	12.2
2. 1時間以上3時間未満	32.8	35.2	16.2	28.1
3. 1時間未満	19.1	17.4	9.4	15.3
4. 家ではほとんどしない	43.3	41.5	48.2	44.4
	100.0(293)	100.0(270)	100.0(278)	100.0(841)

$$\chi^2 = 99.35 \quad p < .001 \quad df = 6$$

た生徒の比率は、ほぼどの年次でも変わらない。1年次で63.5%。2年次で55.4%。3年次で58.8%である。やはり、約5～6割の生徒は塾を含め家庭で勉強をしていないことがわかる。

休日における勉強時間（塾・予備校での勉強時間を含む）を聞いたのが表6-2である。「ほとんどしない」と答えた生徒の比率は、平日よりは少し減るが、それでも1年次で43.3%。2年次で41.5%。3年次で48.2%と、4割強の生徒が勉強をしていない。3時間以上の勉強時間と答えた生徒は、3年次になると26.3%とほぼ4人に1人の比率を占めるが、2年次（5.9%）、1年次（4.8%）ではその比率は低い。休日だからといって学習に取り組む生徒の比率は低い。以上の学校外での学習状況から、1週間を通してほとんど学習をしていない生徒が多いことがわかる。

### 5) 学習にかかわる自己評価

生徒は学習等にかかわって自分自身をどのように捉えているのか。19の質問項目を用意し、「自分自身について、どの程度あてはまるか」を聞いた。因子分析を行った（表7参照）。5つの因子が抽出され、次のようなネーミングを試みた。

第1因子として、高校での勉強に頑張るといった「学習重視志向」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「1. 中学校の時よりも、高校の勉強には、興味が持てる」という質問項目では、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」を選択する生徒を合わせると

64.6%と過半数を超えている。だが「7. テストや宿題のない日でも、家では勉強している」という質問項目では、この2つを選択した生徒を合わせても、23.7%と低い数値である。なお、「3. 勉強でわからないことは先生に質問したり、聞きに行く」という質問項目では、「とてもあてはまる」と「まあまああてはまる」に答えた2つの選択肢への回答の合計は35.1%と、3人に1人の割合で授業への積極的な態度を示す生徒がいることがわかる。つまり、家庭での学習に比べると、学校での授業には積極的な態度が示されているという特徴がみられる。

第2因子として、勉強も含め高校生活全般の充実を目ざす「生活重視志向」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「19. 自分は勉強や部活にまじめに取り組んでおり、充実した高校生活を送っている方だと思っている」という質問項目では、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」を選択する生徒を合わせると66.1%に達する。また、「10. 文化祭、体育大会、総合学科発表会などの学校行事に、まじめに取り組むことは当然のことだと思っている」と「11. 教師からは、注意されたり、しかられるよりは、ほめられたり、励まされることの方が多い」という質問項目では半数以上の生徒が「あてはまる」に回答している。

第3因子として、他の生徒への同調的な態度を示す「他者への協調志向」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「17. 勉強や進路で悩むよりも、友人関係で悩むことが多い」と「18. 学校で何かをしようとした時、友だちやまわりの人の態度や言葉を気にするこ

表7 自分自身について

質問項目	とてもあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
第1因子 学習重視志向					
7. テストや宿題のない日でも、家では勉強をしている	6.1	17.6	38.4	37.9	100.0 ***
15. テストで友だちよりも悪い成績を取ると、次のテストでは絶対に負けたくないと頑張るタイプである	16.8	34.6	37.5	11.2	100.0 ***
1. 中学校の時よりも、高校の勉強には、興味が持てる	18.8	45.8	28.7	6.8	100.0 ***
3. 勉強でわからないことは先生に質問したり、聞きに行く	5.4	29.7	49.1	15.9	100.0
9. 同じ年次の生徒の中では、自分は、授業中まじめにがんばって勉強している方だと思う	11.2	48.6	35.1	5.1	100.0 ***
16. 尊敬する高校の教師ができたので、自分も高校教師になりたいと思うことがある	4.4	10.1	26.9	58.5	100.0 **
第2因子 生活重視志向					
10. 文化祭、体育大会、総合学科発表会などの学校行事に、まじめに取り組むことは当然のことだと思っている	44.0	46.0	8.6	1.4	100.0
19. 自分は勉強や部活にまじめに取り組んでおり、充実した高校生活を送っている方だと思っている	17.1	49.0	28.5	5.4	100.0 *
11. 教師からは、注意されたり、しかられることよりは、ほめられたり、はげまされることの方が多い	10.7	47.8	36.7	4.8	100.0 *
12. 中学校の時の教師より、高校の教師の方が話やすい	12.4	27.9	40.6	19.1	100.0 ***
8. 自分が就きたい仕事にどのようにすれば就くことができるかを、だいたい知っている	16.9	46.8	28.5	7.9	100.0 ***
4. 高校生のあいだで、話題となるテレビや服装などの流行には、遅れたくないと思う方だ	8.7	35.8	41.8	13.7	100.0
第3因子 他者への協調志向					
17. 勉強や進路で悩むよりも、友人関係で悩むことが多い	8.4	23.6	44.4	23.6	100.0 *
18. 学校で何かをしようとした時、友だちやまわりの人の態度や言葉を気にすることが多い	12.4	37.3	37.2	13.1	100.0
第4因子 人並み志向					
5. 高校卒より大学卒の方が、就職は有利だと思う	53.4	27.9	14.9	3.8	100.0
6. 自分の親や家族は、教育に熱心な方だと思う	10.6	40.5	37.9	11.1	100.0
2. テストの成績や運動の能力等をまわりの同級生と比較し優れている点よりも、劣っている点が気になる方だ	23.1	41.4	29.4	6.2	100.0 **
第5因子 同調圧力への無関心志向					
14. 同じ学級の生徒と意見が合わなかったり、好かれなくても、気にならない方だと思っている	14.5	36.4	39.9	9.2	100.0 **
13. マンガを読んだり、テレビを見るのは、同じクラスの友だちと比べると多い方だと思う	10.9	25.8	44.4	18.9	100.0

項目前の番号は、質問紙での配列順序

注) 年次別にみて、\*は5%の水準で、\*\*は1%の水準で、\*\*\*は0.1%の水準で、有意差があることを示している。

とが多い」。この因子は、高校生活の中で友人やクラスの生徒の存在がかなり大きな比重を占めていることを予測させる結果である。

第4因子として、「人並み志向」とネーミング可能な項目があげられる。この因子は、高校生活を含め将来の職業生活にわたり、不利な状況に陥ることを避けようとする考え方と関連性が深い。高校生活を含め、マイナスの評価を受けたくないとか、普通並みの自己評価を求める質問項目が該当する。とくに「5. 高校卒より大学卒の方が、就職は有利だと思う」では、「とてもあてはまる」を選択する生徒が53.4%、「まあまああてはまる」を選択する生徒が27.9%。合わせると81.3%に達する。

第5因子として、「同調圧力への無関心志向」とネーミング可能な項目があげられる。すなわち、「14. 同じ学級の生徒と意見が合わなかったり、好かれなくても、気にならない方だと思っている」では、「とてもあてはまる」を選択する生徒が14.5%、「まあまああてはまる」を選択する生徒が36.4%。また、「13. マンガを読んだり、テレビを見るのは、同じクラスの友だちと比べると多い方だと思う」という項目（設問）も、平均値より離れた行動への自覚とか認識を聞いている。

### 3. M高校生にとっての学習（勉強）の意味

では、M高校生にとって学習とはどのような意味を持つのか。量的な点からみると、学習量は多いとは言えない。しかし、高校における授業（学習）には一定以上の興味を示し、まじめに学習に取り組んでいることも明らかになった。そこで、学習の意味・意義をどう捉え、学習をどう理解しているのか、つまり、高校生の学習観を、つぎの3点から探っていくことにする。

#### 1) 高校生活における学習

学習は高校生にとってどのように位置づけられているのか。例えば、学校でのさまざまな学習、友人とのかかわり、学級での活動、学校行事への取り組み、あるいは

部活動など、高校生としての高校生活全体の中で勉強（学習）はどのように位置づけられているのであろうか。ここでは、学習（勉強）という行為を自分の生活の中に、どう位置づけているかという学習意識、ないし、勉強の価値をどう評価しているかの問題、つまり、高校生の学習観を明らかにしていく。

表8は、「勉強を第一に考え一生懸命に取り組まないと、高校生活は充実しないし楽しくならない」という考え方への賛否を聞いた。つまり、勉強を高校生活の中心に置く考え方を肯定しているかどうかである。

「1. その通りである」と肯定する生徒は、1年次で7.2%、2年次で11.5%、3年次で9.0%、全体で9.2%。「2. まあまあその通りである」と回答する生徒は、1年次で24.2%、2年次で31.5%、3年次で21.7%、全体で25.7%。この結果は、消極的であれ、勉強を生活の中心に置く考え方を肯定する生徒が約35%、3人に1人の割合であることを示している。逆に言えば、必ずしも勉強中心でない生活を肯定し、「思わない」を選んだ生徒の方が3人に2人の割合であり、多く占めている。

#### 2) 高校での成績観

次に、成績（テスト等）の良い、悪いはどのようなことによって決まると考えているのか。生徒の成績に対する見方、つまり成績観をみていくことにする。

表9は、自らの成績（テスト等）が良い場合とか、悪い場合に、そのことをどのように捉えるのか。良い時、逆に、悪い時にその原因をどこに求めるのか。つまり、原因帰属論の考え方を参考にし、家庭の経済力等の要因を加味し、次の6つの選択肢を用意し、自分の考えに近いものを、この選択肢から順位を付けて2つ選んでもらう回答形式で聞いた。その選択肢は次の通りである。

1. 生まれつきの頭の良さ
2. テストの前にどれだけ勉強したか。勉強時間（努力）が多いか、少ないか
3. 教師の教え方がうまいか、へたか。わかりやすいか、どうか

表8 「高校生の時には、勉強を第一に考え一生懸命取り組まないと、高校生活は充実しないし楽しくならない。」という考えについて、どのように思うか。

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. その通りだと思う	7.2	11.5	9.0	9.2
2. まあまあその通りだと思う	24.2	31.5	21.7	25.7
3. あまりそうだとは思わない	43.7	36.7	35.4	38.7
4. まったく思わない。勉強以外にも楽しくて充実することはあると思う	18.4	13.3	24.9	18.9
5. なんとも言えない	6.5	7.0	9.0	7.5
	100.0(293)	100.0(270)	100.0(277)	100.0(840)

$\chi^2=22.41$      $p < .01$      $df = 8$

表9 高校での成績（テスト）の良い、悪いはどのようなことによって決まるとお思いますか。

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. テスト前の、勉強時間（努力）が多いか、少ないか	70.5 (87.8)	70.7 (89.0)	65.1 (88.9)	68.8 (88.5)
2. テストに出そうな問題を、自分で計画を立てて勉強しているかどうか（傾向と対策しだい）	13.7 (44.6)	13.3 (53.8)	16.2 (48.7)	14.4 (48.9)
3. 生まれつきの頭の良さ	8.6 (23.7)	10.4 (25.5)	10.8 (23.9)	9.9 (24.3)
4. 教師（塾の教師も含め）の教え方が上手か、下手か。わかりやすいか、どうか	5.8 (36.3)	4.4 (25.8)	4.7 (26.5)	5.0 (29.7)
5. テストで出た問題が、幸運にも解ける問題であるかどうか（偶然とか、運しだい）	0.7 (4.4)	0.4 (3.6)	1.1 (6.7)	0.7 (4.8)
6. 問題集や参考書を買えるとか、塾や予備校に行くことができる等の家庭の経済力	0.0 (1.5)	0.0 (1.2)	0.7 (3.5)	0.2 (2.0)
7. その他	0.7 (1.8)	0.7 (1.1)	1.4 (1.8)	1.0 (1.6)
	100.0	100.0	100.0	100.0

注) 各項目の上段の数値は第1位選択、下段の括弧の中の数値は第1位選択と第2位選択の合計

4. テストに出そうな問題を、自分で計画を立てて勉強しているかどうか（傾向と対策しだい）
5. テストで出た問題が、幸運にも解ける問題であるかどうか（偶然とか、運しだい）
6. 自分に合う問題集や参考書を買えるとか、塾や予備校に行くことができる等の家庭の経済力

結果をみると、選択率がもっと高いのが、1の「努力（勉強時間）」の多寡である。実に第1位選択で68.8%という高率であり、第2位選択まで加えると88.5%と9割に近い生徒が選択している。次いで、2の「傾向と対策しだい」（第1位選択14.4%、第2位選択まで加えると48.9%）である。これに比して、3の能力に関する「生まれつきの頭の良さ」が第1位選択9.9%。また、家庭の文化資本ともいえる勉強への援助という点での6の「家庭の経済力」の選択は皆無である。

さらに、顕著な数値は、4の「教師の指導力」である。その第1位選択率をみると、1年次5.8%、2年次4.4%、3年次4.7%、全体で5.0%と低い。成績の良し悪しの原因が教師の指導力であると捉える生徒が少ない点は興味深い。

### 3) 教師への生徒の対応

表10は、授業の中で、教師による説明や解説をしっかりと聞いて、まじめに勉強することの必然性ないし必要性について聞いた。この質問項目は、授業においては当然のこととされていることを、生徒自身は自らどのように解釈し、こうした行動を選択しているのであろうか。それを探ることにする。

1. 将来、希望する職業に就いたり、やりたいことをす

- るためには、高い学力が必要だから
2. 先生の説明や話をよく聞いて勉強すると、よくわかり、テストで良い成績が取れるから
3. 授業中は「先生の言うことを聞くのはあたりまえ」という気持ちで、先生に接しているから
4. 先生は教科書の内容について深い専門的な知識を持っているので、先生を信頼できるし、先生から多くのことを学べるから
5. 授業でまじめに勉強しないと、注意され、叱られ、評価（内申点等）の点数が悪くなるから
6. 授業でまじめに勉強すると、先生から良く思われ、評価（内申点等）の点数が良くなるから
7. 熱心に授業をしている先生を見ると、まじめに勉強しないと悪い気がするから
8. 先生のもつ人間的な魅力にひかれて、先生を尊敬し、勉強に取り組んでいるから

年次別にみると第1位選択では有意な差はみられるが、第2位選択では有意な差はない。最も選択率の高いのは、自分の将来を考え、学力の必要性を感じている点から、教師への対応のし方も決まる、という理由である（第1位選択で、1年次60.3%、2年次53.8%、3年次40.9%、全体で51.8%、第2位選択を含めると、1年次69.6%、2年次67.3%、3年次73.2%、全体で63.8%）。教師との関係性では、自分の将来のためという功利性に基づいた行動だともいえし、この功利性を基盤に教師の権威への自発的服従が成立しているともいえる。

そして、この学力の必要性という理由が半数以上の生徒から選択されているために、他の理由の選択率は高くない。続くのが、信頼性という理由である。すなわち、

表10 高校での先生との関係から考えて、授業の中で、先生の説明や話しを、しっかりと聞いて、まじめに勉強しなければいけないと、考える理由は

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. 自分の将来のために、学力を身に付ける必要があるから (学力の必要性)	60.3 (69.6)	53.8 (67.3)	40.9 (73.2)	51.8 (63.8)
2. 先生の説明や話をよく聞いて勉強すると、よくわかり、テストで良い成績が取れるから (信頼性)	13.4 (34.3)	13.5 (31.8)	10.6 (28.4)	12.5 (31.5)
3. 授業中は「先生の言うことを聞くのはあたりまえ」という感じで、先生に接しているから (正当性)	6.2 (18.5)	7.1 (19.8)	15.3 (28.5)	9.5 (22.2)
4. 先生は教科書の内容について深い専門的知識を持っているので、信頼できるし、多くのことを学べるから (専門性)	5.9 (27.5)	9.8 (26.5)	12.8 (33.7)	9.4 (29.2)
5. 授業でまじめに勉強しないと、注意され、叱られ、評価(内申点等)が悪くなるから (強制性)	6.2 (18.1)	5.3 (17.3)	2.6 (11.5)	4.7 (15.6)
6. 授業でまじめに勉強すると、先生から良く思われ、評価(内申点等)が良くなるから (報賞性)	2.8 (12.9)	4.9 (17.6)	6.2 (12.4)	4.6 (14.3)
7. 熱心に授業をしている先生を見ると、まじめに勉強しないと悪い気がするから (関係性)	2.1 (9.6)	2.6 (10.2)	5.1 (17.1)	3.3 (12.3)
8. 先生のもつ人間的魅力に惹かれて、先生を尊敬し、勉強に取り組んでいるから (人間性)	1.7 (6.2)	2.3 (6.7)	3.6 (9.8)	2.5 (7.5)
9. その他	1.4 (3.3)	0.8 (2.8)	2.9 (4.5)	1.7 (3.5)
	100.0	100.0	100.0	100.0

注) 各項目の上段は第1位選択、下段の括弧の中は第1位選択と第2位選択の合計%

「2. 先生の説明や話をよく聞いて勉強すると、よくわかり、テストで良い成績が取れるから」(第1位選択で、1年次13.4%、2年次13.5%、3年次10.6%、全体で12.5%、第2位選択を含めると、1年次34.3%、2年次31.8%、3年次28.4%、全体で31.5%)。なお、これに次いで、教師であることの正当性、教えることの専門性といった理由が続く。なお、第1位選択をみる限り、その他の4つの理由、すなわち、教師の人間性、教師との関係性、教師の行使する強制性と報賞性に対しては低い選択率であることがわかる。

次に、学習との関連において、生徒は教師への対応において、どのような特徴を示しているのか。表11は、設問「高校の時に、教師の指示を守らず反抗したり、校則

を破るような生活態度では、高校での勉強(成績)は良くならないし、社会に出て(仕事に就いても)うまくいかない。」への回答である。つまり、普段の生活態度と勉強(成績)との関連性を問う設問とその回答である。

年次による有意な差はない。「その通りだと思う」が1年次39.7%、2年次41.7%、3年次34.4%、合計38.6%、これに「まあまあその通りだ」を加えた肯定的回答の合計は、1年次75.9%、2年次78.2%、3年次74.3%、合計76.1%。つまり、4人中約3人の割合で、普段の生活態度と勉強(成績)とに関連性が高いという考えを肯定する。生活と勉強は別物ではないと捉える生徒が多い。

さらにこの結果を、先の表8とのクロス分析をしたの

表11 「高校の時に、教師の指示を守らずに反抗したり、校則を守らないような生活態度では、高校での勉強(成績)は良くならないし、社会に出て(仕事に就いても)うまくいかない。」という考えについて。

	1年次	2年次	3年次	全年次計
1. その通りだと思う	39.7	41.7	34.4	38.6
2. まあまあその通りだと思う	36.2	36.5	39.9	37.5
3. あまりそうだとは思わない	13.1	11.3	13.2	12.5
4. まったく思わない。	4.1	2.3	1.8	2.8
5. なんとも言えない	6.9	8.3	10.6	8.6
	100.0(290)	100.0(266)	100.0(273)	100.0(829)

$$\chi^2=8.52 \quad df=8$$

表12 高校生活を勉強第一と考えるかどうか別にみた、教師への対応を通じた成績向上観

	1.強く肯定	2.まあまあ肯定	3.否定的	4.判断保留	合計
1. その通りだと思う	71.1	13.2	11.8	3.9	100.0 (76)
2. まあまあその通りだと思う	46.5	39.4	8.5	5.6	100.0 (213)
3. あまりそうだとは思わない	30.1	45.1	18.8	6.0	100.0 (319)
4. まったく思わない。勉強以外にも 楽しくて充実することはあると思う	31.8	35.0	22.9	10.2	100.0 (157)
5. なんとも言えない	31.7	28.6	6.3	33.3	100.0 (63)
	38.5	37.6	15.3	8.6	100.0 (828)

$\chi^2 = 122.60$      $p < .001$      $df = 12$

が表12である。

勉強第一と考える傾向の強い高校生は、生活態度の問題においても、教師の指示や校則に従わないようでは成績も良くならないと捉える傾向がみられる。すなわち、有意な差がみられ、勉強第一と考える生徒では、強く肯定が71.1%。これに対して、勉強第一と考えていない生徒では、この肯定の数値が低くなっている。すなわち、高校生活の充実が勉強だけだと「あまりそうだとは思わない」生徒の肯定の比率は30.1%また、「まったく思わない。勉強以外にも楽しくて充実することはある」と考える生徒の肯定の比率は31.8%。「その通り」への回答率)である。つまり、高校生活を勉強第一と考える生徒ほど、教師の指示や校則を守って生活することが大切であると考えられる傾向がみられた。逆に、高校生活を勉強第一だとは考えない生徒ほど、教師の指示を守ったり校則を破ることと成績の向上とは関連性が低いと考える傾向がみられた。

#### 4. おわりに

本稿は、大学進学階層では中堅に位置するM高校の生徒の学習観、すなわち、学習(勉強)する意味を明らかにすることを通して、高校生の学習の問題点や課題を探ってきた。そして、特に次のようなデータに着目した。

1つは、今日の高校生にとって、高校での学習(勉強)はどのように位置づけられているのか。表8の結果によると、高校生活の中で、学習(勉強)の比重が高くない現状がみられた。学習(勉強)が第一だと考える高校生は三分の一程度である。

2つは、学習(勉強)の結果・成果としての成績(テスト結果)の良し悪しは、何によって決定されているか(表9)。努力の多寡によると考えている高校生が圧倒的に多い。生まれつきの頭の良さとか、教師の教え方がうまいかそうでないかは重要な理由とは考えられることが少ない。

3つは、高校生が、教室の中で、まじめに学習(勉強)に取り組む意味を、教師との関係のあり方から探った(表10)。自分の将来を考え、学力を高めることという功利性を基盤に、教師への自発的服従ともいえる授業態度を最も大きな理由としている。

4つは、高校での生活態度のあり方が、高校での学習(勉強)や卒業後の生活の送り方にも一定程度影響すると考えている(表11)。

M高校は、わが国の大学進学ヒエラルキーの中では中堅校であり、M高校の特徴を踏まえてM高校の高校生の学習観を明らかにしてきた。さらに今後とも、このヒエラルキーや高校の教育成果、特色ある教育内容に着目しながら、事例の抽出や学科等の差異を踏まえて、わが国の高校生の学習観にせまっていく必要がある。

#### 注)

- 1) 植木理恵、2002、「高校生の学習観の構造」『教育心理学研究』50、pp.301-310。  
市川伸一、1995、「学習動機の構造と学習観との関連」『日本教育心理学会第37回総会発表論文集』p.177.
- 2) なお、学力低下問題の中で学習時間の相対的な減少や二極化を指摘した研究として、苅谷剛彦、2000、「学習時間の変化」樋田大二郎他『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、pp.149-164.など。
- 3) 文部科学省編『学校基本調査報告書(初等中等教育機関・専修学校・各種学校)』(平成26年度)

なお、本調査は、平成25年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(研究課題番号、25381153)により実施した。

(みなみもと おさお・関西学院大学教授)